

進捗状況の概要 【1ページ以内】

本事業は、パイロット事業の成果を基に、課題を踏まえて、将来東アジアを舞台に国際的に活躍できるグローバル人材であるアジアクラットを共同で育成し、本邦の教育の国際化、将来へ向けた人材育成へ資すると共に、岡山大学の教育の国際化を推進させることを目的として、平成28年10月より開始した。コンソーシアムの協定校である中国・吉林大学、韓国・成均館大学校との連携により、具体的な進捗として、学生のモビリティ確保、持続的な全学実施体制の構築、教育交流における新規分野開拓とダブル・ディグリーの実施、コンソーシアム内外の中長期的な教育連携体制の構築を主な柱として、以下の通り取り組んできた。

1. 平成28-29年度においては、派遣、受入ともに計画通りの学生交流（モビリティ）数を実現した。半年から一年間の交換留学は、当初、伸び悩んだが、短期研修には想定数以上の参加者があり、キャンパス・アジア事業の情報や内容が周知されるようになった。これに伴い、平成30年度の交換留学生数は当初の計画数を上回る見込みである。
2. 本事業補助金終了後も、キャンパス・アジア事業を持続的に実施するための全学体制を、各学系および語学教員からなるワーキング・グループが中心となって検討してきた。派遣学生には、事業担当教員及び語学教員による事前学習の充実、受入学生には、キャンパス・アジア共通科目を開設して全学系から教員が担当して、専門科目と共に教養教育を含めたアジアクラット育成の体制を整えた。
3. 従来の人文社会学系及び医歯薬学系に加えて、自然科学系セミナーやワークショップを立ち上げ、研究交流やフィールドワークを含めた幅広い形で開始し医歯薬系では、ナノバイオコースを発展させた先端医療応用コースを実施した。平成29年度からは、薬学系において成均館大学校のダブル・ディグリー博士課程大学院生を受入れている。社会文化科学研究科では共通教科書の実用化、ラーニング・アグリーメントの考え方により実質化を進め、自然科学系と共に、ダブル・ディグリーの実施に向けた体制を整えた。
4. コンソーシアムの協定校とは、平成29年2月に岡山大学で行われたキックオフミーティング、同年10月に中国・吉林大学で行われた三大学交流フォーラムにおいて、事業担当教員による実務者会合を開催し、現行及び中長期的な教育連携体制について、課題の共有と方向性について意見交換を行った。特にラーニング・アグリーメント及びダブル・ディグリーの制度化と学生支援について協議した。

今後の課題として、本事業の目指すアジアクラット育成に向けて、語学教育の充実、大学院レベルのダブル・ディグリーの全学的展開とジョイント・ディグリーに向けた制度の確立と実施、共通教科書、共通科目の効果的な運用が挙げられる。

学生のモビリティを高め、長期の専門的な大学院レベルの教育・研究交流を推進すると共に、その土台となる英語と地域言語の修得、リベラル・アーツも重要な要素として、アジアクラット育成に向けて進めていく。単位互換や学位取得の質保証を進めると共に、学生の個々のニーズに対応したインディペンデント・スタディ（個人の関心に沿った個別指導）やインターンシップ・プログラムの充実を進めていく。

本学を中心戦略である「持続可能な開発目標（SDGs）」の枠組みの下、東アジアにおけるコミュニティから国家間交流の持続的な発展、協力関係の構築を目指し、その中核的人材を育成するために、中長期的な視野で今後の事業を展開していく。

【本事業における中間評価までの交流学生数の計画と実績】

平成28年度				平成29年度			
派遣		受入		派遣		受入	
計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績	計画※	実績
40人	49人	40人	52人	55人	56人	55人	56人

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

1. キャンパス・アジア事業は、岡山大学における全学的事業として展開している。これまでの人文社会科学系と医歯薬学系に加え、自然・環境生命学系においても短期・長期の派遣及び受入プログラム開発を行っている。また、各学生の専門分野の研究教育に加え、学際的な内容の共通科目を開設し、多様な関心を持った留学生へのインディペンデント・スタディ（個人の関心に沿った個別指導）においても、廃棄物処理の社会学と環境学からのアプローチによる研究活動を行うことで対応を行った。
2. コンソーシアム内の協定校とは、定期的な交流活動を通じて、キャンパス・アジアの中長期的な展開に向けて協力体制構築を進めている。平成29年10月に吉林大学で行われた三大学交流会では、担当理事、各学系教員、大学院生、事業担当教職員が参加し、それぞれの分野における研究交流や意見交換を行った。
3. 様々な分野の研究課題に対応するため、また、マルチリンガルな人材育成を目指して、大学院レベルの英語科目も含めたキャンパス・アジア冠科目を設定した。これにより、ラーニング・アグリメンツの趣旨に沿ったスムーズな授業の履修を始めることが出来た。
4. パイロット事業における教養教育から、本事業における専門教育への展開に向けて、大学院レベルでのダブル・ディグリーの制度化を推進してきた。人文社会学系においては、各大学間との協議により実施体制が整い、薬学系においては、ダブル・ディグリーの学生受け入れを開始している。
5. 学生のモビリティ確保という量的な交流実績の達成と共に、プログラムの質の向上に向けて、短期プログラムを単なる相互訪問ではなく、講義やセミナー、フィールドワーク、学生交流などの多面的に経験できる内容とした。短期プログラムの参加者から交換留学への参加者も派遣・受入ともに増加し、留学経験者の学習・生活体験の共有が、短期プログラムへの参加者の増加にもつながっている。
6. パイロット事業から取り組んできた思想及び経済に関する共通教科書（『東アジアの共通善 和・通・仁の現代的再創造をめざして』および『日中韓経済学』）が、補助金に頼らない自立した事業として継続されるめどが立ち、多言語での出版も進めている。
7. 国際共同研究を視野にいれた教員間の交流を進めた結果、自然科学系では新たに大学院生を1か月間以上研究目的で留学させることで合意に至った。長期の専門的な大学院レベルの研究交流活性化への端緒となっている。
8. 受け入れた留学生の中には、プログラムに参加したことで国際的な視野を広げるとともに、実践に通用する高度なマルチリンガル能力を身につけたことにより、母国以外の国（日本）で就職した。このことからアジアクラット育成（中核的高度実践人）が一步ずつ前進している。
就職先：日立製作所、大丸松坂屋百貨店、株式会社TPS
進学：同志社大学